



小・中学生の授業中のような
パズルは予想外に出来ます
10/29 今日から土曜特講、最初は計算特講でした。(下3校)

28期生で高専の電子工学科4年生、小澤涼香さんが久しぶりに。大学に進むかどうか迷ってましたが進学を決意です！

定期テストの11月です！
コロナ感染がまた徐々に増えてきています。これから冬に向かいます。インフルエンザ流行の兆しもあり気を抜くことは出来ません。
11月は中学校、高校ともに定期テストです。特に中3生は学力Cと道コンもあります。本格的な受験勉強(12月~2月)に入る前の大事なテストです。また、中3生は11月、12月は終わった人から帰れる数学の土曜特講があります。
高校入試まで122日です。志望校に向けて積極的な姿勢で臨みましょう。
季節の変わり目です。体調に注意してしっかり取り組みましょう。
ちゃんとあいさつをしましょう！
昨年と同じことを書きましたが、塾に来た時、帰るときに聞こえるようにあいさつの出来ない生徒が多いことです。初めと終わりのあいさつは社会人になってもとても大事なことです。コロナ禍の影響だと思いますが、あいさつだけは大きな声でちゃんと出来るようにしましょう！

型不良なブラック校則、生徒自ら撤廃運動も
釧路で見直しの動き

夏も女子だけ厚着、ネクタイ着用義務：
釧路市内の中学高校で校則見直し動きが活発化している。頭髪や服装などを理不尽に制限し、時代に合わないような「ブラック校則」が全国的に問題視される中、規則に疑問を持ったり自主性を求めたりする生徒が声を上げ、実際に撤廃に至ったケースも出ている。

道立阿寒高では、女子生徒を対象に夏期にベストかニットを着るとした校則規定を今年撤廃した。前生徒会長で3年生の飯塚華南心(かなみ)さん(17)が会長選に立候補した際、この規定見直しを「公約」に掲げ、就任後に教師に見直しを提言したのがきっかけ。飯塚さんは「夏にワイシャツの男子が涼しそうなのに、女子だけ厚着になるのはおかしいと感じていた」と話す。同校によると、この規定がいつどのように定められたかは不明という。



校則が書かれた生徒手帳を手にする阿寒高の生徒。夏にはベストかニットを着用するとして規定が見直された

釧路市内でも比較的校則が厳しいことで知られている市立北陽高。校則には「流しの車での誘いには一切応じてはならない」といった近年あまり聞かない表現や、「服装、頭髪を整え、流行を追うようなことをしないこと」との規定がある。

同校によると、生徒の約8割が大学入試や就職などで面接を受けるといい、「いつ社会に出てもいいように身だしなみを整えてもらいたい」(担当者)と妥当性を説明する。その一方で「時代に合わないものは順次見直しを検討したい」といい、暑いと不評だった女子生徒の夏季のネクタイ着用義務規定は昨年度、撤廃した。

同校のある3年生女子は「確かに他校と比べ校則は厳しいが、特別な準備をしなくても面接に臨める

ので助かっている」と不満はない。別の3年生男子は「(頭の側面を刈り上げ段差をつける)ツーブロック」は先生によって認めたり、禁止したりするので基準をはっきりさせてほしい。使用が禁止されている携帯電話は、学校行事の写真撮影時くらいは認めてほしい」と訴える。

■中学の半数で検討

校則見直しの動きは中学校でも。釧路北中は今年1月、校則の見直しに関して生徒から寄せられた10項目の意見や要望のうち、服装や頭髪についての7項目を了承した。これまで禁止されていたヤカチューシヤ使用、式典以外での色つきの靴下着用などが認められるようになった。

釧路市教委によると、2~3年前から市内中学校で校則の見直しの動きが盛んになった。現在は市内15の中学校のうち約半数が、生徒と教職員による校則委員会を設け、生徒にアンケートを行うなどして見直しを検討しているという。

文部科学省は今年8月、ブラック校則の是正に向け、児童生徒の生活面の注意点を示した教員用手引書「生徒指導提要」の改訂版をまとめた。校則に子ども意見が反映し、必要性が説明できない場合、検証して見直すことを求めている。

校則に詳しい名古屋大大学院の内田良教授(教育学)は「規則にがんじがらめだと、子どもたちは決まりを守ることが難しくなり、何が正しいのか自分で考えられなくなる」と指摘。「ツーブロックや色つきの靴下を認めたら、果たして学校現場が荒れるのか。『決まりだから』と思考を止めるのではなく、子どもも教師も一つ一つの校則の妥当性や文言、廃止した場合の影響を日頃から考えてほしい」と話す。(上田惟嵩、今井裕紀)

北海道新聞 10月27日

ブラック校則に関して全国的に見直しが広がっているのは良いことです。しかし、成人が18歳となってもまだこんなことをやっていること自体が問題です。今の若者たちは、と言われるような若者たちをつくっているのは教育現場そのものです。

18歳まで制服を着せられ、校則でしぼられ続けた若者たちに、積極性や考える力、発想力を求めるのは無理です。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火
			休				勤			休	◆中3生道コン◆		美	富			休	●中3生関数特講②	◆学力Cテスト◆					休	●中3生関数特講①	文		景	
			休				感			休		原	原													化		雲	
			謝				謝			謝		青	青													日		3	
			の				の			の		陵	陵													休		年	
			日				日			日		定	定															期	
												期	期															(
																													2)

大きな声であいさつを！
過保護・過干渉は子供をダメに！

高校入試まで122日！
11月の予定

「高学歴＝幸せ」信じ、子育てする親がズレてる訳 個性や特性を無視して理想を押しつけるのが問題だ

2021年夏、ネット上で、ある記事を見た私は、わが目を疑いました。「『小1プロブレム（小学1年生の学習態度や能力のパラツキが大きいこと）』を解消すべく、文科省が就学前の5歳児に対する教育プログラムを検討している」というのです。

「まだ文科省は昭和の価値観から抜け出せていないのか……」と、時代に逆行する政策に絶望を感じずにはいられませんでした。

いま日本の学校教育に求められている喫緊の課題は、「子どもはこうあるべき」という画一的な指導ではなく、子どもたち一人ひとりの個性や特性に合った学びを提供すること。

そもそも子どもの学習態度や能力にバラツキがあるのは当然で、ましてや7歳児となればなおさらのことです。それが「個性」であり、「多様性のある社会」とは多様な個性が尊重される社会のことを言うのです。しかし、日本の教育現場の辞書には昔から「個性」という言葉がずっと存在しないままでした。そのために、平均的ではない子どもたちはみな「プロブレム（問題）」扱ひされてしまいます。

拙著『2040 教育のミライ』でも詳しく解説していますが、ここで声を大にして伝えたいのは、本来、子どもたちに「問題」などないのだ、ということです。「問題」なのはむしろ、予定調和の教育しか提供できない教育システムと、自分の理想を子どもに押しつける親のほうなのです。

幸せになるために IQ より大切なもの

私は子どものいる・いないを問わず「教育」に興味のある人たちと、子どもの教育、ボランティア教育活動、海外の教育事業動向など、さまざまな話題で意見を交換することがあります。特に中学受験をテーマにする際、必ず問ひかける質問があります。「皆さんの考える教育の『目的』は何ですか？」と。

すると「自立した大人になるよう支援すること」「子どもがやりたいことを見つめる環境を整えること」という答えが大多数を占めます。また、ストレートに「偏差値の高い大学に入ってもらおうこと」と口に出す人こそないものの、もはや暗黙の了解になっているのだな、と感じます。

しかしいまの時代、「日本で高偏差値の大学に入ることが子どもの幸せに直結する」と、どこまで確信を持って言い切れるでしょうか。

「IQ より EQ (Emotional Quotient : 心の知能指数)」と言われるように、どんな学校に入るかとか、どんな企業に入社するかといった表面的な成果を目的とするのではなく、「幸せになることが得意な人格」の形成を目的にすべきだと私自身は思うのです。

世界標準の教育目標と日本の乖離

ここで、視点を世界に広げてみましょう。フランス・パリに本部を置き、経済と教育の関係性を不可分のものとする OECD (経済協力開発機構) が世界中の教育者たちと20年もかけて議論し、言語化した教育目標があります。それが「ラーニングフレームワーク 2030」です。言ってみれば、「これからの時代に教育者たちが目指すべき世界共通のゴール」です。

このフレームワークによると、教育の最終目標は「社会全体のウェルビーイング (社会全体が良くあること＝人々が心身ともに健康で幸福であること)」とあります。

では、「社会全体のウェルビーイング」を実現するためにはどうすべきか。OECD は、個人に次の3つの資質を求めています。

- ・物事に主体的に関わる力
- ・クリエイティブな力
- ・対立を解消する力

これらの資質は、まさに世界の産業界全体で求められている能力と言えます。欧米の教育者たちは、こうした資質を持つ子どもたちを「社会全体で育てる」にはどうしたらいいかを真剣に議論し、現場に落とし込む教育改革を何十年にもわたって続けています。

翻って、日本ではどうでしょう。日本の学校教育において個人の資質として求められていることは相変わらず「ペーパーテストを解く力」が主流です。

その結果、一流と言われる大学を出ても言われたことしかできない人、創造性の乏しい人、価値観の違いを乗り越えることが苦手な人、当事者意識に欠け問題解決を先送りにする人、世の中への貢献よりもお金と役職に執着する人が、政治や行政、民間企業の要職につき、組織の成長にブレーキをかけてしまっているのです。

インバウンドの増加の裏に潜む日本の衰退

日本では、平均賃金もひどいありさまです。購買力平価ベースの日本の平均賃金は現在約4万ドルで、OECD 平均の約5万ドルを下回っています。

1位はアメリカで、約7万ドル。ここ20年で日本は平均賃金を下げましたが、アメリカは倍増させています。日本はいまや EU の中で財政難にあえぐイタリア

と同じグループにあり、そのすぐ下のグループには旧共産国や財政破綻したギリシャが迫っていることをご存じでしょうか。

株価についても、2021年の暮れに日経平均の年末終値が32年ぶりの高値をつけたというニュースが流れました。しかし、これは裏を返せば「日本は32年間経済成長していなかった」ということです。その間、アメリカのダウ平均は12倍になっています。

「でも、インバウンドが増えているじゃないか」という意見もあるかもしれませんが。たしかに新型コロナウイルスが流行る前、日本のインバウンド需要は異常な高まりを見せ、2019年に日本を訪れた外国人は3000万人を超えました。わずか8年で5倍の増加です。

こうした現象に対して「日本の良さが世界に知れ渡ったからだ」「日本のサービスや製品がいいからだ」といった前向きな意見もありますが、その実態は「日本が貧乏になったから」という理由にはかなりません。かつて日本人がアジア各国に貧乏旅行をしていた感覚で、今はアジア各国の人たちが、安全で物価の高い日本で旅行を楽しんでいるのが現実なのです。

このように、経済や国力の観点から見れば、日本の教育は十分に機能しているとはとても言えない状態であることがおわかりいただけると思います。それはつまり、日本社会全体に停滞を打ち破るような変革者がまったくと言っていいほど現れていないということでもあります。

その根本にあるのが、子どもたちに同質性を求めるあまり、個性を異物とみなす学校教育であり、テストでいい点数をとった人間だけを優秀な人材とみなす学力至上主義なのです。

才能の一極集中が日本の再浮上を妨げる

ここで警鐘を鳴らしておきたいのが、日本の超エリート層にはびこる「東大理科三類 (医学部) 至上主義問題」です。

小さい頃から神童扱いされる子どもが、周囲の大人から「これは将来、理三で医者だね」と言われ続けて育つ。本人も大学の偏差値ランキングを見るたびに「理三」が一番上にあるので、そこを目指すことに疑問を感じなくなる。

このように、子どもの高学力の証明のためだけに理三を目指す大人が少なくありません。しかしその結果、理三に入っても医療の世界に進まない人や、人格的に問題のある医師が生まれてしまう、ということが実際に起きています。

ただ、この傾向は数年前から少しずつ変わり始めています。たとえば、数年前まで灘高で成績上位の卒業生のほとんどが東大理三や京大医学部を志望していましたが、この2、3年、東大理一などの情報系学部を目指す学生が増えているそうです。

ITバブルが弾けた2000年以降しばらくの間、情報系学部は世界的に不人気でした。その時代からすると隔世の感がありますが、いまでは海外の著名IT起業家は大学でコンピューターサイエンスを専攻していたり、巨大IT企業の花形職種がソフトウェアエンジニアであることが、情報系学部の人気を確固たるものにしていきます。このように、あらゆる産業分野に優秀な人材が散らばる流れが広がっていているのです。

磯津 政明：ソニー・グローバルエデュケーション会長、教育フューチャリスト

東洋経済 Online 2022/10/01

「なんで勉強しなきゃいけないの？」に対する答えが秀逸。

「たそがれ清兵衛」に学ぶ子どもの導き方 理学博士 中村 桂子

「学問したら何の役に立つんだろう」(「たそがれ清兵衛」より)

子どもの頃、勉強は嫌いではありませんでした。今まで知らなかったことを知ると、とっても嬉しくなったものです。

今でも本を読んだりテレビを見たりして、新しい星が生まれるところを大きな望遠鏡で撮影した写真に驚き、さまざまな場所で暮らすさまざまな人々の生き方に感心する日を送っています。子どもの頃と同じだなあと感じます。

子ども時代は、原っぱへ行くたびにびっくりするほど上手にトンボをとる男の子がいて、すごーいと思いました。今は『ボツンと一軒家』(テレビ朝日系)という番組で、野菜を上手につくり、裏山をきれいに整備して暮らす人々に感心しています。

先祖伝来の地を守っての暮らしを大切に、お墓や神社のお掃除をていねいになさる姿からは充実感がうかがえます。時には山を眺めながらお風呂を楽しみたいからと露天風呂を自分でつくってしまう人もあり、感心しながら羨んでいます。

大人にも子どもにも暮らし方が上手な人はたくさんいますから、学びに終わりはありません。(中略)

清兵衛の長女萱野(かやの)が萱野は論語を詠みながら「お針を習えば自分で着物が縫えるようになる(だから習う意味がよくわかる)。でも学問は何の役に立つんだろう」と聞きます。清兵衛はしばらく考えて、「学問すれば考える力がつく。考える力がつくとも世の中どう変わってもなんとかして生きていける」と答えるのです。

山田洋次監督はいつも、社会の権威に向けて疑問をぶつける作品を世に出していらっしゃる。自分で考えて、本当に大事なことを見つけながら生きる普通の人を描いているところに共感します。ぜひ「たそがれ清兵衛」観てみて下さい！